

2017年7月

在コスタリカ日本大使館 経済班

※出典：コスタリカ中央銀行、財務省、貿易省(COMEX)及び貿易振興機構(PROCOMER)(4-6月分数値)。主な出来事については当地新聞記事¹⁾による。

1 主要経済指標

	2016年	2017年		
		4月	5月	6月
累積輸出総額 FOB (100万ドル)	9,197.4	3,434.7	4,427.6	n.a.
累積輸入総額 CIF (100万ドル)	15,324.7	5,013.4	6,451.6	n.a.
貿易収支 (100万ドル)	▲ 5,410.5	▲1,578.8	▲2,007.1	n.a.
財政収支対 GDP 比 (%) (2017年は年初からの累積額の対 GDP 比)	▲5.22	▲0.96	▲1.21	n.a.
消費者物価指数(CPI:2015年6月時点の物価を100)	99.87(年末値)	100.58	100.80	100.88
為替(通貨はコロン。1米ドル当り銀行買値・月末値)	539.14(年末値)	557.90	567.37	567.09
政策金利 (%)	1.75(年末値)	1.75	4.00	4.50
基本預金金利 (%)	4.45(年末値)	4.60	4.55	5.70
外貨準備高(100万ドル)	7,573.8	7,300.6	6,832.9	6,812.6

2 経済全般・貿易

今年に入って加速したコロン安傾向が今後一層強まれば経済成長にとって好ましくないが、コロン安の恩恵を受け輸出が好調になっており、経済成長はこれまでのところ大きな懸念はない。近年のブームである新車購入に関しては、車両のドル建て輸入価格の上昇により、売り上げは減少傾向ではあるが、コロン安はさほど大きくは影響していない。しかし、失業率は9%超と依然高く推移していることに加え、今後は貸出金利の上昇が内需の減少をもたらすことが予測されている。

3 財政

財政状況は今年になってから着実に悪化している。むしろ、2016年が国際経済環境を含む外部の好条件が重なった例外的な年であった。国会における財政改革法案の審議は大方の予想通り今年になっても遅々としている。コロン安の影響は財政にも及んでおり、例えば予算執行における利息払い(年初から4月まで)の対前年同期比は9.3%増加と2016年

¹⁾ ラ・ナシオン紙, ラ・プレッサリブレ紙, ラ・レプブリカ紙, エル・フィナンシエロ紙

の対前年同期比 0.6%増加を大きく上回っている。

4 物価

消費者物価指数は、原材料費や石油の高騰の影響を受けているが、食品など生活必需品の価格上昇はさほどではなく、物価全般が急激に値上がりしているわけではない。他方、今後はコロナの影響が徐々に物価に反映されていくことになると思われる。

5 為替・金利

コロナ傾向が続いており、5月には為替相場は1ドル当り600コロン近くまで下落した。コロナ傾向の主たる原因は、現在のドルの収益性の高さや安全資産としてのドルの需要増が挙げられ、コロン保有のメリットが乏しいことにある。中銀のドル売り介入は、例年より頻繁になっており、コロナの加速に随時一定の歯止めがかかっているものの、外貨準備高は今年6月までに前年同月比で1,000百万ドル以上減少した。中銀はコロン保有のインセンティブを高める政策として、政策金利を年初の1.75%から4.5%へと大きく上昇させ、基本預金金利も上昇した。

コスタリカのみならず、大半のラ米諸国は現在自国の通貨安傾向に直面しているが、コスタリカ中央銀行等が2014年6月から2017年6月までの3年間のラ米諸国の自国通貨の下落率を調査したところ、コスタリカ・コロンの下落率は2.8%であり2番目に低い数値であった。コスタリカ・コロンは、近年のラ米諸国の中ではどちらかと言えば安定傾向で推移してきたといえよう。なお、1位はグアテマラ・ケツアルの▲5.5%、最下位はアルゼンチン・ペソの98.1%の下落である。

6 その他の経済ニュース（出典：当地報道など）

●コーヒー生産：2017年のコーヒーのカップ・オブ・エクセレンス

コーヒーの国際的オークションであるカップ・オブ・エクセレンスが今年も6月に当地開催され、ロス・サントス地方のドン・アントニオ農園のコーヒーが、1キントル(46kg)あたり8,060ドルの最高落札値により今年最優秀コーヒーに選出された。ニューヨークのコーヒー取引所ではコーヒーの価格は1キントルあたり平均123.80ドルである。

このコーヒーの品種はゲイシャ種であり、ロス・グランデス・デ・コペイ・グループが所有しているが、日本の丸山珈琲が昨年の5,900ドルの落札価格よりも37%増の価格を付けた。他にも日本のタイムズクラブが8,030ドルの落札価格を付けたコーヒーがある。

●観光：オサ半島の魅力

ナショナル・ジオグラフィック社が、世界で最も美しくロマンティックな場所として9つの地名をリストアップしたところ、コスタリカのオサ半島が第4位となり、ラ米諸国では第1位となった。この地域はコルコバード国立公園内であり、コスタリカで最大の自然

保護区である。同誌は、オサ半島を熱帯林、湿地帯、山々を含んだ生物の多様性がある地域と評価している（なお、世界で最もロマンティックと評価されたのはフランスのパリ。ラ米諸国では他にチリのアタカマ砂漠やボリビアのウユニ塩湖がランキング入り）。

●観光：米国ディスカバリー・コミュニケーションズによるテーマパークの建設決定

米国のディスカバリー・コミュニケーションズは、コスタリカのグアナカステ県リベリア市に 1,000 百万ドルを投資し、テーマパークを建設すると発表した。ブルームバーグの報道によれば、このテーマパークは「ディスカバリー・コスタリカ」という名称であり、生物の多様性保護に焦点を当て、クライミング、トレッキング、ダイビング等が可能であり 2020 年の完成を目指すという。建設工事はサン・ラテンアメリカ社が請け負う。

グアナカステ地方は、観光のためのインフラが整備されており、コスタリカ観光庁(ICT)は、本年 1 月に 5 つのホテルの新規建設を発表している。テーマパークは、リベリア市のダニエル・オドゥベル国際空港の近くに建設され、旅行者からアクセスしやすい。

●教育：コスタリカの大学の評価

イギリスの大学評価機関「クアクアレリ・シモンズ社 (Quacquarelli Symonds :QS)」がラテンアメリカの 394 の大学を評価したところ、コスタリカからは 6 つの大学が選定された。評価は 100 点満点であり、コスタリカ大学が 82.1 点で第 18 位（中米では第 1 位）、ナショナル大学が 65.9 点で 50 位、ラテンアメリカ科学技術大学が 42.6 点で 122 位であり、その他ラテン大学、国際協力大学、国連平和大学が続く。ラテンアメリカで第 1 位の評価を得たのはブラジルのサンパウロ大学であった。スペイン語圏ではチリのカトリカ大学の 3 位が最高であった。

●外国投資：Tholons 社の 2016 年版アウトソーシング拠点トップランキング 100

米国系投資アドバイザー企業 Tholons 社のアウトソーシング拠点トップ 100 ランキングにおいて、コスタリカの首都サンホセは、ラ米において第 1 位であった。世界ランキングでは 11 位であった。コスタリカでアウトソーシングをしている企業の例は、HP, IBM, Sykes, AEGIS などである。

ラ米において、ランキング入りした拠点が最も多いのはブラジルであり、6 拠点が入った。これにコロンビア 4 拠点、メキシコ 3 拠点が続く。ラ米のトップ 5 は、1 位サンホセ市（コスタリカ）、2 位クリチバ市（ブラジル）、3 位サンパウロ市（ブラジル）、4 位サンティアゴ市（チリ）、5 位ブエノスアイレス市（アルゼンチン）である。

●外国投資：ブリヂストン 50 周年

コスタリカのエレディア県で操業しているブリヂストンが、5 月に 50 周年を迎え記念式典が開催された。同社は、設立当初は米国のファイアストーンとして操業していたものの、ブ

リジストンがその工場を買収し現在に至る。現在この工場は1,000人以上を雇用しており、日々12,000個のタイヤを生産している。同社のタイヤの種類は、一般自動車用、トラック用、耕作機用など幅広く、この50年間で6,700万個のタイヤを生産した。

同社は、このタイヤ生産工場のみならず、カルタゴ県トゥリアルバに自動車部品生産工場、エレディア県にラ米を営業範囲とする財務センターを有している。環境保全にも定評があり、バイオマス燃料による自家発電所を有し過去2年間で二酸化炭素の排出を55%削減したり、生産工程で発生した廃棄物のリサイクル率を93%に高め、また、これまで投棄された1万個のタイヤを自主回収し、それらを再利用したB-Happyという名称の公園を国内に34所設置した。同社は、これらの実績によりコスタリカ国内では優良企業の一つと認識されており、ソリス大統領も工場を訪問している。

●運輸：LCCの路線拡大

近年中米各国に就航するLCCの路線が増えつつある。中米には現在10社のLCCが就航しているが、コスタリカは域内で1週間あたりの航空便の全座席に占めるLCC座席数の割合は20%と域内で最高である。中米で就航している主なLCC航空会社はメキシコのVolaris, Interjet, パナマのWingo, コロンビアのVivaColombiaである。コスタリカからLCCの直行便が運航されている国は米国、カナダ、メキシコ、グアテマラ、エルサルバドル、ニカラグア、パナマであるが、依然南米への直行LCCは就航していない。

中米諸国間は移動時間が元々短く、LCCが運航を開始して間もないため、中米全体の1週間あたりの航空便の全座席に占めるLCC座席数の割合は8%と依然高くない。そのため今後の増便や路線の増加が期待されている。中米でハブ空港の役割を果たしているのはパナマである。パナマの1週間あたりの飛行機の全座席に占める同割合は3%とコスタリカより大分低いが、一般航空会社の運航本数がコスタリカを大きく上回っている。エルサルバドルもハブ空港ではあるものの、空港のサイズはパナマの4分の1である。

(了)